

生徒の質問について

授業時間外に生徒から質問を受けることがよくあるのですが、その内容は千差万別で、生徒のために質問と、ためにならない質問に大きく分かれるようです。今回は具体的な例を挙げて、どのような質問がためになるのかを書いてみたいと思います。

まず、問題集だけを持ってきて、この問題がわからないから教えてほしいと言ってくる生徒がいます。ここで大切なことは、生徒本人がどのくらい自分で考えたのかということです。しかし残念ながら、この手の質問をする生徒の大多数はほとんど自分で考えていません。少しやってみるから質問という安易な行動をとっているのです。これではいつまでたってもできるようにはなりませんし、教えたところで、その場しのぎにしか過ぎません。質問するときには、十分に自分で考え、自分で調べてきてほしいものです。最悪の場合などは、問題集の解答すら読んでいないということもあります。質問というのは、解答にはこういう説明をしているが、その意味がよくわからないといった具体的なものであるはずで、

また、ノートを持ってこないというのも問題です。自分の考えたノートもなしに質問をするのも困ったものです。質問するときには必ずノートを持ってきましょう。

次に、質問の内容で、授業中に説明したと全く同じという場合があります。私が、これは授業中に説明しただろうと言うと、たいていの場合、そんなことは覚えていないと答えるのです。これなどは、後で質問すればいいやという事で、授業中に話を聞いていなかったこと、の証です。質問にくることは大いに結構なことですが、この手の質問は困ります。授業が主であるにもかかわらず、これでは本末転倒です。

私は、質問の内容や、そのやり方によってはすぐには答えられないようにしています。答えることが本人のためにならないからです。まず自分で考えることが大切なのです。教えてもらったものはすぐに忘れてしまいますが、自分で考えたものはなかなか忘れないものです。今後、質問にくるときは、十分に自分で考え、質問する内容を整理してきましょう。人に頼ってばかりいて自分の頭を使わないような勉強は、結局本人のマイナスにしかなりません。



（村上）

「がんばるつちや、仙台」

まず、東日本大震災で被災された方々に心からお見舞い申し上げたい。被災地になつてしまった仙台は私にとって大変思い入れのある街である。そんな仙台について想うことを書き記したい。

私は仙台に住んでいたことがある。名取川近くの太白区南仙台という地区だった。引越した

ときは「なかなかの田舎だなあ」「深夜のテレビはNHKと通販だけかよ」と関東の生活と比較ばかりして、仙台での生活について恨みがましいことをよく言っていたものだ。

しかし、「住めば都」とはよく言ったもので、時間が経つにつれ、次第に愛着が湧いてきた。なかなか快適な気候で、夏は涼しく、冬はそれほど雪が降らない。(山形からの西風が吹くと大変寒いのだが)秋保、作並といった温泉は近く、食事はとにかく美味しい。ササニシキに松島の牡蠣、牛タンに日本酒、塩竈の寿司……。挙げればいくらでも出てきそう。

若者からすれば、東京と比較して少々足りない街かもしれないが、ある程度の年齢になると、これがなかなか住みやすい街であることが分かってくる。車で三〇分ちよつと走れば海に温泉、スキー場だつて行けるし、新幹線を使えば東京へ2時間くらいで行けるのだ。物価も関東よりは安い。老後はこんな街で過ごそうかなと考えさせてくれる、かなりいい街であると私は思っている。

そんな街が三月十一日に壊滅する。ニュースで入ってくる光景を見て、言葉が出てこなかった。絶句である。仙台時代の友人とは連絡がつかず、震災から一週間経つてようやく連絡がつく。幸い本人と家族、共に無事だったのだが、配給されたおにぎり一つを家族四人で分けて食べ、カセットコンロで湯を沸かし、それで体をふくことが入浴代わりになつていくといった生活を聞いていると何も言えなくなつてしまった。

電話先から「頑張りますよ、俺は」の声で救われたのを鮮明に覚えている。「何か手伝えることはないか」としか私は言えない。「酒を持って

きて一緒に飲みましょう」との返事が酒好きで常に前向きの彼らしい。彼の生活が落ち着きを取り戻したら、宮城の銘酒で彼と一杯やることにしよう。

連休を迎え、「杜の都」も少しずつ復旧してきたとのこと。現地での消費活動をしてくれることが大きな支援になることはマスコミでも伝えられているが、これは事実と友人も指摘しているので間違いないようだ。読者各位には、機会があれば仙台を体験して支援していただきたい。



(山崎)

川と少年の物語に寄せて

●ノリオという名のその少年の物語が、これほど脳裏から離れない年はない。

●例年なら夏の少し前、あるいは盛夏のころであるろうか、小学生の国語の教科書準拠ワークで扱う作品である。太平洋戦争当時を背景としているからだ。今年は春の講習、まだ寒さの残る三月の終わりに、物語のほんの一部がテキストに登場していた。読むたびに心をつかまれる、いや、しみ込んでしまうと云うべきか、答えは出ないと分かっているのに考えこんでしまったいへん優れた作品、描写が美しくもたいへん悲しい作品だと思ふ。

●戦争で父を、そしてヒロシマ(原文カタカナ表記)の原爆で母を亡くす幼い少年。物語はおそらく開戦の少し後、早春から始まる。あつたかい母ちゃんのはんでんの中で、ほつぺたの上の

涙のあとに、すずすずと川風の冷たさを感じる。幼いノリオ。幼すぎておそらくは母ちゃん
と自分の二人の時間だけが世界のすべて。
●秋。出兵する父を見送る母子。父ちゃんの
かたい手のひらが、いつときもおもしろいよう
うに、ノリオの小さい足をすずすずといたつた。
少年と母は、その後、橋の上で広い夕焼けの空
を眺める。ぬれたような母ちゃんの黒目に映
って、赤とんぼがすいすい飛んでいった。
●いく度目かの夏。あの年の八月六日に向けて
物語は暗転してゆく。
●ドド……ンという遠いひびき。あの日の朝以
来、母ちゃんは戻ってこない。じいちゃんが
ノリオの雑すいをたいた。ときどき、じいちゃ
んの横顔が、へいげにののように、ぎゅっとゆ
がむ。ごま塩のひげがかすかにゆれて、ぽつと
り、ひざにすくが落ちる。
●授業で読み合わせたのは、じいちゃんが、母
ちゃんを探して暗いヒロシマの町を歩く次の場
面。折り返ってたおれた家々と、折り返な
っている人々の群れ……。子供を探す母ちゃん
と、母ちゃんを探す子供の声。
●三月十一日からまだそれほど経っていないかっ
たので、報道番組の映像と、目の前の活字から
自分が描いた映像が重なってしまったのだろう、
目と口を開いたままで表情が固まる少年、「あ
つ」と(声に出したのか、それとも聞こえたよう
な気がしただけか)息をのむ少女。「今、東北の
沿岸部では(物語ではなく)この現実と向き合っ
ているのだ」という説明はもはや必要なかった。
●一九四五年八月太平洋戦争終結という史実は
一つの、百人いれば百通りの、千人いれば千
通りの、戦時下の、そして戦後のリアルが、現

実の生活があつたはずだ。一九五六年には「も
はや戦後ではない。」と謳われたそうだが、歴史
観もそれに対するリアリティも、個人が抱えて
いたものや、どんな日々をどんな思いで生きて
きたのかで、想像を超えるような差異があつた
はずだ。
●「じいちゃんの工場のやぎっ子の干し草刈り
がノリオの仕事。」桜の木につながれた幼い子
ヤギが甘え声で鳴いてノリオを呼ぶ。小学2年
のノリオはやぎっ子としゃれあつ
て、遊んであげている。そのとき
白い日がさをさした女性が子供の
手を引いて歩いて行くのを見る。ノリオはフツ
と仕事を思い出し、カマを手にする。以下が物
語の最後の場面。
「サクツ、サクツ、サクツ、母ちゃん帰れ。
サクツ、サクツ、サクツ、母ちゃん帰れよう。
川は日の光を照り返しながら、いつときも休ま
ず流れ続ける。」
●「サクツ、サクツ、サクツ、」はカマと草が
出す物理的な音。「母ちゃん帰れ。」はその瞬間
(または永遠に)、心の中で無限に響いてしまう
少年の悲しみ。「母ちゃん帰れよう。」にいたつ
ては……。はたして人の喪失感は何かで癒され
得るものなのか。歴史にすがれば、何かそこに、
せめて返答らしきものがいくばくかでもあるも
のなのか。
●広島と長崎の人々は、どのように立ち上がり、
どうやって歩み続けたのだろうか?もちろん物
的・経済的援助や物的・経済的復興と、それぞ
れの人々が向き合っている現実や抱えている背
景等とは、階層を別にして捉えなければならな
い。他者では力になれない当事者だけの深い悲



受験勉強とは バケツに水を汲む作業

●随分前に、一緒に働いている人から教えても
らった比喻がある。「勉強はバケツに水を汲む作
業にたとえられる。たまつた水が学力。」なるほ
どうまい例えである。以来、生徒と話すときに
使わせてもらっている。
●受験勉強に限らず、何かを身につけるために
は、繰り返すことが大切である。テニス部もサ
ッカー部もみんな毎日毎日練習するのだ。「一週
間休んだらどうなる?」と質問すると、吹奏楽
部もバスケット部もこう答える。「下手になります。」
「元にもどすにはどのくらいかかる?」と聞け
ば、「かなりかかります。一週間では足りませ
ん。」
●実は、受験勉強も全く同じである。一週間休
むと下手になるのである。学力は低下するので
ある。しかしこれが、なかなか分つてもらえな
い。そこで、バケツの比喻を使って説明をする
こととなる。受験生は読みなさい。他の学年も
読みなさい。できれば保護者の方も読んでいた
だきたい。
●勉強とはバケツに水を汲む作業である。たま

しみ、深淵なる物語があるだろうから。それら
を抱え、それでも歩み続けなければならな
かつた当時の多くのノリオたちの姿に、作者は、
優しくも冷たい川の、休まぬ流れを重ねたのだ
ろうか。
(五日市)
出典…いぬいとみこ作『川とノリオ』

つた水が学力。最初は水を汲むのも下手である。
少ししか汲めなかつたり、バケツ
に入れる途中でこぼしたり……。
でも続けていくうちに、たくさん
汲めるようになり、速くなり、こ
ぼさなくなる。つまり学習能力が
上がるのである。しかし、バケツに穴があいて
いるとしたら、つまりやり方が悪いとしたら、
水は汲むそばから流れ出していく。汲んでも汲
んでも増えない。そこで、やり方を直す必要が
ある。先程、たまつた水が学力だと書いたが、
やり方を直しても(穴をふさいでも)汲むのを
やめたら、水は増えない。そして水だから、蒸
発していく。つまり学力は、勉強をやめたら低
下していくのである。バケツの水を増やすには、
休まず汲み続けるしかないのである。
●そして、もう一つ、厄介なことがある。バケ
ツの水が増えていっても、つまり学力は少しず
つついていっても、点数はなかなか上がらない
ということである。勿論永遠に上がらないので
はないが、かなり時間はかかる。では、いつ上
がってくるのか。それは、バケツの水が一杯に
なつたときである。「〇月〇日」に一杯になる
よ。」とはいえないが、汲み続ければいつか一杯
になる。そして、一杯になつ
たとき、水を汲めば溢れ出す。
それが点数がグーッと伸び
るときだ。当然目には見えな
い。見えないからこそ、続け
るための工夫も決意も必要
だ。その手伝いが私達の仕事。
精一杯応援するぞ。
(小林(健))



▼▲継続希望の方へ▲▼
▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、
ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお
送り致します。
▶在籍していた教室までご連絡下さい。